

太宰府の絵師調査事業広報誌

# 宰府画報

第30号

2026年4月  
(令和8年)

発行  
太宰府市教育委員会  
文化財課



バックナンバーはこちらから

## 逸品探訪

齋藤家資料  
吉嗣家資料

## 隠れた逸品

# 吉

吉嗣梅仙画

松岩図

(芝仙延年図)

不変、不老を象徴する

松と岩、それに靈芝を配した図は芝仙延年図とも呼ばれます。

梅仙が還暦を迎えた明治11年(1878)に描かれた作品で、余白には長崎や清国の文人による賛文が寄せられています。

本作で注目されるのは中国人とおぼしき人物の賛が複数あること、その中には清国でじかに書かれたと見られる賛があることです。明治11年は拜山が清国に渡

航した年で、つまり拜山が父の描いたこの絵を携え、行く先で会った人物に賛を請うたものと考えられるのです。画面の上部中央に賛をする許若蓮は、拜山の渡航日記『日間些事記』に登場し、揚州で面会したこと、元氣潑刺な75才の能書家だったことなどが記されています。

拜山とともに海をわたり、日中の文人がコラボした、貴重な還暦祝いの逸品です。(井形栄子)



202.7 × 35.4cm

197.5 × 38.2cm

絹本墨書・着色 江戸時代後期

# 斎

齋藤秋圃・麟太郎筆

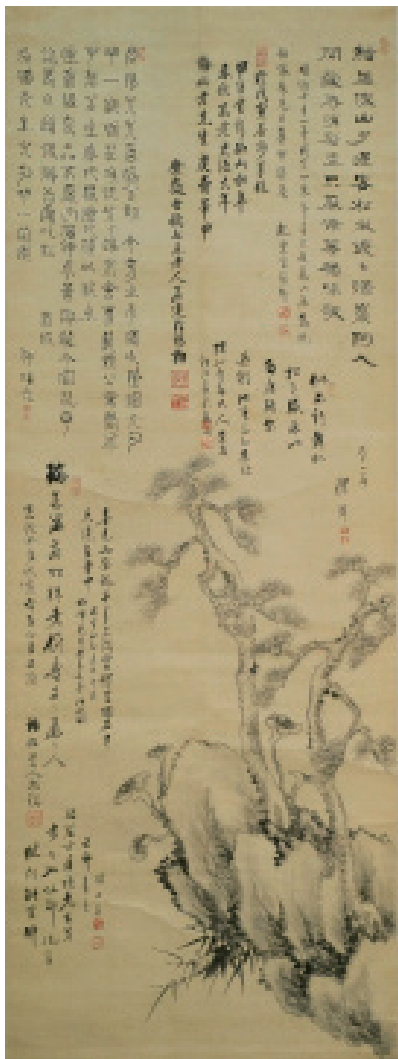
縦約2メートルの絹地に書かれた幟です。右の幟にはしなやかな書風で「葵術車行」、左の幟には墨のかすれを気にせぬ大らかな書風で「齋藤麟太郎章光」と書かれています。

文化2年(1805)に秋月藩のお抱え絵師となった秋圃は、はじめ姓を葵、名を衛と称していた(秋圃は雅号)、同10年に齋藤姓にあらためました。この間に生まれたと思われるのが長男の麟太郎です。

# 幟

麟太郎は文政11年(1828)に家督を継ぎましたが、10年後に江戸で出奔、絵師の家業は三男の梅圃が継ぎました。麟太郎に関する資料は少なく実像がはっきりしない中、この幟は麟太郎のたしかに存在を示す貴重な品です。

秋圃の幟に描かれた2羽の鳩は、上方時代の雅号「双鳩」を暗示するもの。秋圃らしい遊び心ですが、金色で描かれる鳩の表現には気品があります。(井形栄子)



絹本墨画・墨書 掛幅装 140.3 × 51.9cm 明治11〜12年

30号 特別企画

齋藤家 吉嗣家

御子孫インタビュー

齋藤秋圃と梅圃父子。梅仙・拜山・鼓山と続いた吉嗣家3代。齋藤家資料、吉嗣家資料と称している膨大な資料群は、戦災などをのがれ、御子孫たちが大切に守り伝えたからこそ現存しているものです。本誌30号の特別企画として、両家や資料にまつわるお話しを伺ってきました。



齋藤 由紀子 さん

1945年生まれ  
太宰府市在住

「齋藤由紀子さんは初代秋圃、2代梅圃と数えて6代目となる仲道氏の妻。仲道氏は太宰府の絵師調査事業の開始時から資料の一括寄贈にいたるまで当主として御協力をいただきましたが令和4年（2022）に他界。由紀子さんには仲道氏の思い出とともにお話しただきました。」



秋圃絵付の能面散らし書と徳利がお気に入り

い、帰国後は現場と研究の二足のわらじを履いた熱心な人でした。私は夫が渡米する昭和42年（1967）に結婚しましたが、それまで齋藤秋圃が名のある絵師だということ は全く知りませんでした。」

—太宰府と下関の家

「明治39年（1906）に3代文山が58才で亡くなった後、ほどなくして4代孝弘、つまり夫の祖父が知人の紹介を得た御縁により下関で開業することになりました。5代孝俊も下関で医師となり、仲道は昭和15年（1940）に下関で生まれました。下関の家には秋圃の作品や資料もあったそうですが、第二次世界大戦中に蔵が焼けて失われたと聞いています。一方、太宰府には文山の妻フミと次女の歴（孝弘の妹）が残って暮らしていましたが、昭和2年（1927）に、孝弘が主導して現在の建物新築したそうです。太宰府市に寄贈した資料は、太宰府に残されていたため戦災を免れたものです。廊下になにやら大きな箱があるな、とは思って

なんだかわからない箱があるな  
と  
思っていたら  
それが大事な資料でした

いしましたが、後で貴重な資料なのだと知って驚きました。」



齋藤家から市長から大蔵市前市長 齋藤由紀子氏に資料寄贈の感謝状を受け取る 齋藤仲道氏（2018年）

—齋藤邸の移築と資料寄贈

「昭和10年代半ば、4代孝弘氏は京の公家ゆかりという秋圃の出自と齋藤家の系譜を調査され、齋藤家資料の中には孝弘氏が京都の醍醐家や賀茂神社に照会した手紙の返信などが複数あります。5代孝俊氏も秋圃に関する調査を続けて執筆を残されています。一方、昭和56年（1981）に、当時九州大学教授の中野三敏氏が、秋圃が大坂の新町遊郭で逗留だったという意外な経歴を明らかにされました。」

「平成14年（2002）の移築は、たまたま夫と共通の知人がいたという御縁で、近畿大学産業理工学部（飯塚市）の工藤卓先生に建築の指揮を執っていただきました。その際に例の資料が見出され、工藤先生と同じ大学の橋富博喜先生（美術史）によって重要なものであると確認されたことは御承知の通りです。太宰府市の絵師調査事業で調査が引き継がれ、立派な報告書刊行というかたちでまとめていただいたので、資料の保存と積極的な活用を期待して一括寄贈の運びとなりました。齋藤家資料をもとに秋圃研究が活発になり、深化している現状を喜ばしく思っています。」

（令和8年〆2026〆3月2日取材）



## 吉嗣文成さん

1946年生まれ  
太宰府市在住

「吉嗣文成さんは梅仙、拝山、鼓山と続く吉嗣家の5代目。鼓山の孫にあたります。文成さんには、祖父の記憶や思い出、自宅を改装して営んだ料理屋「古香庵」や「ホテルカルティア太宰府」にまつわるエピソードなどを、御自身の経歴や経験を豊富に交えて語っていただきました。」



吉嗣家に伝わる硯とともに

「父の晋(吉嗣家4代)は早稲田の文学部に進学して歴史や考古学を学びました。卒業後、一時宮内庁に入りましたが、後に帰郷して西鉄に就職しました。私も東京の大学に進学しましたが、文系

ではなく理系、専攻は化学です。民間企業に就職した後、9年ほど国会議員の秘書をしまして、その後、仲間と会社を立ち上げ、新聞社請負の調査やイベント企画などに関わってきました。」

### 祖父・鼓山と吉嗣家の記憶

「直接わかるのは私が11才の昭和32年(1957)まで存命だった鼓山だけです。当時、庭に離れの建物があった、祖父はそこを書斎にしてずっと書いていました。孫ということもあるでしょうが、一度も怒られたことがなく、とても優しい人でした。吉嗣家と言えばやはり拝山が有名ですが、いわゆる「博多拝山」とか「石坂拝山」とかいいう拝山公認の贋作師がいたという話も聞いたような…。絵はよくわかりませんが、拝山の書には威厳と風格があるなと思います。あと、鼓山の書は個性的でわかりやすいですね。具体的なエピソード

### 家に満ちていた墨のにおいが とても記憶に残っています

### 後記・謝辞

ドではないですが、家の記憶というところ「墨のにおい」かな。祖父が毎日磨っていたからか、家に満ちた墨のにおいに落ち着いた気分になっていたことを思い出します。」

### 太宰府天満宮と古香庵

「本家は天満宮の下級神官で、次男だった梅仙は独立して絵描きになりました。家がすぐそばということもあり、拝山も鼓山も天満宮に関わる揮毫をたくさんしています。天満宮とのつながりは深く感じていて、「古香庵」もしっかりです。前段階として、数年前から天神地下街の味のタウンに母が始めた和食レストランがあつて、ある時期から太宰府の自宅で仕込みをやっていました。すると天満宮から、大事なお客様がいらした時にここで料理を提供してくれないかということになって、それがきっかけとなって昭和42年(1967)に古香庵の営業が始まったんです。両親が他界してからは妻がずっと切り盛りしてくれてとても感謝しています。」

齋藤さん、吉嗣さんともに、御子孫だからこそ知る事実や興味深いお話をざつぱらんに語ってくださいました。太宰府に深く歴史を刻んだ先祖代々を誇りに思いながら、それに縛られることもないと飄々とした御様子はおふたりに共通して印象的でした。御多忙の中にインタビューをお引き受けいただきましたこと、心より感謝申し上げます。

(聞き手・文責 井形栄子/録音・補助 木村純也)

### ホテルカルティアと吉嗣家資料

「平成28年(2016)に古香庵を閉めた後、太宰府市内で古民家ホテルのセミナーがあつて、それがきっかけで、この家をホテルにリノベートしようという話になりました。これまで料理屋をやってきましたから、やっぱりレストランを併設してほしい、それから大正3年(1914)に拝山が建てた蔵は客室にしたいと思いました。天井の木材に書かれた拝山の書(左写真)を見ていただきたくて。タイミング良く、蔵の中にあったものを全部市で預かっていただき、詳しく調査してもらっていることにはとても感謝しています。太宰府の歴史としてみなさんに関心を持っていただき、後世に伝えてもらえれば先祖供養になるかなと思っています。」

(令和8年^2026^3月4日取材)



「大正三年七月建設」と書かれた拝山の書

トクベツ  
メイブツ

×

いろいろ  
くずし字

## 秋圃と拝山の ラッキースタン・フ

### 齋 【天賜長年】

江戸時代は平均寿命が現代よりも短く長寿は珍しいことでした。88歳まで生きて作品も制作し続けた齋藤秋圃はまさに長寿だったと言えるでしょう。



#### この資料

印面 3・9×2・8 cm  
総高 3・5 cm  
材質 木  
年代 天保12年（1841）  
齋藤家資料

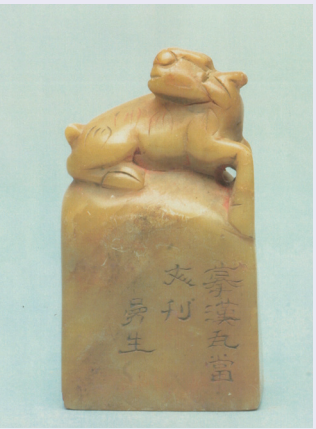
齋藤家資料に伝わるこの印章は、長寿の象徴である可愛らしい亀（きつと日本石亀）が特徴的ですが、注目すべきは側面の文字です。「天保辛丑冬仲制為賀」「秋圃老人古稀比多□山民」と彫られ、これが天保12年（1841）の冬に、秋圃の古稀（70歳）を祝して作られたものだと分かります。

秋圃は安政6年（1859）に92歳で亡くなったとされていますが、この印章や、天保3年（1832）の還暦祝いの資料、天保15年に73歳と記される画稿が見つかったことから、現在は安永元年（1772）に生まれ、安政6年に88歳で亡くなったと考えられます。印面には「天賜長年」と刻まれており、天から長寿を賜ったということの意味します。右上の「天」は上下に分かれ、下部は「介」のように見えます。右下の「賜」は「貝」が「見」のようになっています。左上の「長」は下部分が山のように書かれています。「年」は旧字体の「季」をさらに崩した表現になっています。



### 吉 【蘇道人】

吉嗣拝山は幼少より書画を学んできましたが、幕末から明治初期にかけて官僚として岡山や東京で働いていました。そんな拝山の運命を一変させたのが、明治4年（1871）の事故です。倒壊した家屋に巻き込まれ、一命をとりとめるものの、利き腕である右腕を失い官僚としてのキャリアを諦めることとなります。事故後すぐに南画家として活動を始めた初期の雅号の一つが「蘇道人」です。蘇道人とは蘇っ



#### この資料

印面 2・7×1・8 cm  
総高 4・7 cm  
材質 石  
作者 曼生（陳鴻壽カ）  
吉嗣家資料

た人を意味し、事故により隻腕となった拝山の文人として生きていく覚悟を示しているかのようです。

この印章の側面には「摹漢瓦當文刊」（漢の瓦當文を模し刊す）「曼生」と刻まれ、様々な模様や文字で装飾される古代の瓦を参考にしたものと考えられます。曼生は清国の著名な篆刻家・陳鴻壽の号ですが、本人の作かは検討を要します。印面を見ると、右上の「蘇」は草冠が二つの山に、「禾」と「魚」は通常とは左右入れ替えて配置されています。右下の「道」は「首」の部分を中心に、左右に「乚」が分かれています。左側の「人」は2文字分に及ぶ大きさで線を長く引いており、特徴的な字体となっています。（木村純也）



#### 編集後記

とうとう30号に到達しました。ありがたいことに紹介できる資料や出来事は年々増えています。（木）

念願叶ったインタビュー。ボリュームあり過ぎでやむなく割愛したエピソードは、また別の機会に紹介できればと思っています。（丹）